

## 【巻頭言】

## 不易流行

編集委員 小泉 幸司(短2回生)

卒業してから約30年、月日が経つのは早いものです。数年前から、年に1回母校での講義(医療安全)を行っています。道中、JR 嵯峨野線の車窓から見る風景は、学生時代の記憶を鮮明に呼び起こしてくれます。のんびりとした田園風景は変わりませんが、当時より建物が増えたり高架道路が出来ていたりと少しずつ変化しています。

まずは編集委員として「学友だより」の編集に関わることで、感じたことを書きたいと思います。正直なところ、自身が編集委員になる前は興味を持って読むことはほとんどありませんでした。しかし編集に関わった事で、母校の動向や諸先輩方との繋がりを実感できます。今のところ編集委員会の会議はwebで開催されるので、会議後の深い話などは出来ませんが色々と相談させていただいたりしています。改めて母校のネットワークの偉大さを感じています。

近年インターネット上での情報収集や連絡が主流になっています。「学友だより」も京都医療科学大学 学友会のホームページから閲覧できます。2007年から見ることはできますが、印刷物そのものの全部を見ることができる訳ではありません。お手元に届いている印刷物が完全なものになります。印刷物(完全版)が手元に届くことが、もはやプレミアムサービス。是非ご活用下さい。

本当に変わってはならない事は何なのか？常に疑問を持つておくことが必要です。変化していく部分も、時代に沿って固定化されれば変わってはならないものになる。この2つは相反する事を言っている様だが、本来その境目は極めて曖昧でなだらかなグラデーション。本質は同じである。変化が急峻で予測が不確かなこの時代、曖昧な部分を受け入れることのできる寛容で柔軟な能力が必要とされている。今後も我々の職種や職場が存続していくためには何事にもAかBかと決めるPolarity(二極化)ではなく、AでもありBでもあるDuality(二元化)が必要であると考えている。こういった考え方ができれば、色々と発展的に考えることが出来るし、日々の暮らしが少しだけ楽になるかも知れません。

先日ロンドンで開催された ISMRM(国際磁気共鳴医学会)で、“Does AI technology pose a threat to radiologic technologists’ jobs?”と題した非常に興味深い基調講演があったようです。その中で、「自動化が進んでいるのに従前と同じことばかりをやっているならば、最小限に縮小します。しかしながら、このシナリオの出口は新しい技術や業務を生み出す事である。診療放射線技師は歴史的にみても、画像技術と患者との重要なインターフェースであり、将来においても臨床と研究に不可欠な存在である」とされています。不可欠なインターフェースと言われる存在であり続けるためには、定期的な「自分アップデート」が必要である。年を重ねた今こそしっかりと自覚しなければ。



以上